私の映画手帖

<15>

話題の「ディア・ハンター」

淀川長治〈映画評論家〉

ジョン・フォード監督の「わが谷は緑なりき」（一九四一）は十九世紀末のウエールズ地方の炭坑町の炭坑夫の家族物語があった。

こんど三十七才のアメリカの新人監督マイケル・チミノの大作「ディア・ハンター」The Deer Hunter を見ている、ふと「わが谷は緑なりき」が心のなかに浮かんできたのであった。というのは「ディア・ハンター」はアメリカのペンシルベニア州のクレアトンというところの、そこは鉄鋼町で、その鉄鋼の工場で働いている男たちと、その貧しい町の彼らの家族たちを描いて、その描き方が思わず「わが谷は緑なりき」を思い出させたのであった。

しかしこんどは一九六八年から約五年にわたる時代を描いているのだが、まずクレアトンという鉄鋼所でなりたっている小さな町と鉄鋼所の労働者と、彼らが必ず呑みにゆく居酒屋、その居酒屋に寄ってくる多くの労働者とバーテンとの会話、友情、人情、それらが実にこまやかに描かれていて、しかもこの鉄鋼の町が（風俗絵）のようにさえ見えるそのキャメラ美術が私たち日本人から見ると観光的でさえあった。

こう書いてくると、このアレゲニー山脈をまじかに眺めるクレアトンとそこに住む男たちがいかにも人情ゆたかに、しかも清らかに思えであろうが、映画の描写はそれを（あらくれ）の一語につきる野性で見せる。よくもこれだけ酒を呑むとあきれてしまう。働いていないときは呑みどうしだ。そんな仲間が、なによりもの楽しみが、岩山にはいりこんでの鹿狩りだった。なかでもマイケル（ロバート・デ・ニーロ）は一発で大鹿を射とめる名人だった。仲間はこのマイケルを加えて五名。その五名のうちの三名……マイケルとニック（クリストファー・ウォーケン）スチーブン（ジョン・サベジ）が一九六八年の初冬の土曜日にベトナムに徴兵というところから、この映画は地獄の本筋にはいってゆく。

ベトナム帰りの兵隊物語はすでに見あきるほど見たのだが、この映画は、アメリカ映画として初めてといえるベトコンの非情な虐殺と彼らの捕虜となったアメリカ兵がどのような地獄の責め苦を受けるかを見せた。捕虜はハリガネのかごに入れ川の中に水びたしにされる。呼びだしを受けた二名。彼らはこの二名を銃殺するのではなく博打の賭けにした。二人に銃を握らせその拳銃には一発だけ装てんし〝クルクル〟と装てんの個所を廻し、運よくその一発射撃で助かるか運悪くその一発で死ぬかをアメリカの捕虜二名に、自分のコメカミに銃を当てさせて、賭けるのである。死のゲームである。これはルシアン・ルーレットと呼ばれている。ふと最初にアレゲニーの岩山で一発のもとに大鹿を射殺したこの映画の初めのころのシーンがよみがえってくる。

けっきょく一人は発狂し一人は片足を失ってしまうのだが、この映画は戦争映画という勇壮とか悲惨というようなものだけでなく、もっと奥の（哀れさ）（人間の運

命）（戦争犯人）（人間とは何か）というような人間の深いこわい谷間を覗かせた。

この映画の初めのこの工場町の荒らくれ男たちの（男）の描き方、そしてスチーブンとすでに妊娠している娘との結婚式、その教会、この教会がこの町にかかる立派な豪華な教会があったのかと驚かせて、この町のスラブ系の町の人間たちと宗教の在りかた、また結婚の町じゅうこぞっての祝宴、スラブ音楽、ダンス、ダンス、この祝宴がまた実に圧観だ。誰もが踊り誰もが歌い誰もが呑む。あの居酒屋の太っちょのバーテンも呑んで踊って、花嫁も花婿も踊って、円を描いて手をつなぎ手を叩き足踏み鳴らしての、このスラブ系の祝宴が、のちに……戦場の地獄にかわり、やがて一人は行方不明、一人は片足を失い、再びこの町に帰還したマイケルとスチーブン……ニックは行方不明……を迎えた家族が二人をかこんでの食卓。あの居酒屋のバーテン（ジョージ・ザンガ）も加わっていつもは酒のコップを運ぶのに今日はコーヒー茶碗コーヒー茶碗……そして食卓を見て〝オムレツでもこさえるか〟とこのバーテンはさも陽気に見せて、さて一人台所でタマゴをわんの中へ割って落とし入れかきまわすところで、ついに、男泣きに泣きだしてしまう。ここが実にいい。

「ディア・ハンター」より

この映画は三時間二分の長足である。俳優はロバート・デ・ニーロ以外はあまり知られていない。ニックの恋人でニックが帰還すれば結婚を夢見ていたリンダにテレビの「ホロコースト」で主演女優のエミー賞を受けたメリル・ストリープが出演しているのを知るくらいである。そしてこの映画の監督も一九七四年「サンダーボルト」（クリント・イーストウッド主演）を初監督したまったくの新人の彼のまだ二作目である。

今やアメリカはコッポラやルーカスにつづいてマイケル・チミノということし三十七才のこんな監督をも生んだのであった。

女体百景

〈79〉

時には娼婦のような女

細川　董（ただす）〈文とえ／哲学者〉

「細川さん！
しょせん女の娼婦性ちゅうもんは、どないもなりまへんなあ」
「ごもっとも」
「どんな女だって娼婦性があるんですよ」
「その通り。
赤ん坊でも男の赤ん坊はさわると怒りよるけど、女の赤ん坊は喜んでもっとさわってくれとさいそくしよる。赤ん坊の時から女は男のそでを引きよる」
「うちの娘がいい例ですよ。
女子大へ今いってるんだけども、この夏、男の大学生五、六人と一緒に海辺へ泊りがけで、遊びに行ってるんですよ。
その時の写真を見て私はびっくりしましたよ。
二、三人の女の子がまるで昔なら娼婦そのものという表情で裸同然のかっこうをしておちちからへそまでほうり出して男共を挑発してるんだなあ。
あんなものが女子大生なんてちゃんちゃらおかしいですよ。
大学生なんてしろものじゃない。
娼婦の群れですよ。
それにむらがってる男共も男共だ。
昔の僕達の学生時代はもっと女に夢をもっていた。
それに今は何ですか？」
と、ふんがいする彼自身は、実は趣味として永年女性の娼婦性ととっくんで来ているのだ。

「ずい分うつして来ました。ヌードフォトを！
始めはプロのモデル専門でした。
色んなポーズで。
気心が通じてくると、皆喜んでポーズしてくれるようになるんです。
大体、自分の体のある部分を自慢に思っている連中だから、見せたくて仕方ない。そこをねらってシャッターを切ると、何ともいえない満足な顔をするんですよ。
細川さんは、写真は？」
「全然」
「やりなさいよ」
「一度、見せてほしいですなあ」
「もちろん、お見せしましょう。
しかし、昔の写真は皆、警察にもって行かれてしまったんです。
だけど細川さん！
実は、素人の奥さん方も意外に私のシャッターの前でぜひうつしてくれといって股を開いて恍惚となさるんです」
「なるほど、なるほど」
「いや、それというのも、私は、ポラロイドでうちのかみさんの写真をもともと撮っていたんですよ」
「え？　奥さんの？」
「そうなんです。
こんなことをいって私を変に思わんで下さいよ」
「思いません、思いません。それで？」

「いや、その、初めは家内もすごく恥かしがったんですが……」
「そりゃ、そうでしょう！」
「あんたは、おかしいんじゃないかと思ったらしいんです」
「それから？」
「しかし、何とかかんとかいって、あそこを写すようになると、女というもんは不思議なものでだんだん平気になって来て、普通に上の顔をうつす時は硬い顔の表情なんですが、あそこをうつす時は実ににこやかに、いい顔をしてほほえむようになってくるんです」
「そんなもんですかなあ？」
「だから女は娼婦性があるというんです。
ここなんですよ。
私がいいたいのは。
細川さん！　ぜひポラロイドカメラで奥さん写してみてあげて下さい。ところでちょっとつき合いませんか？」
「え？　どこへ？」
「いや、ちょっといい店が見つかりましたので行ってみませんか？」
と彼は、新聞の切り抜き地図を私に見せました。
私は彼等夫婦について男のための下着の店へ行ったのです。
彼は小柄で笑顔よしの上品で美しい奥様とヒソヒソ話
「これはどう？　あれはどう？」
と外国より新着の色々のうすものの下着類を彼女にすすめ、彼女も堂々とごく自然にあてて品定めしているのです。そしてすみの方でいた私の所へ近づき彼は
「細川さんも奥さんに一つ買って帰ってあげなさいよ。
そして、こんな写真をとってあげて下さいよ。
ポラロイドで……」
といいながら、ポケットから一枚の女性の写真を私にそっと見せました。
誰のどんな写真だったか？
それは皆様の偉大なる想像力にお任せしましょう。

★〝六段〟が米国ロスに1号店をオープン

元町3丁目の炭焼ステーキ〝六段〟が、昨年12月にロスアンゼルス1号店をオープンした。

ブラッドリィ市長(左)と五明さん

場所はロスのリトル東京日本村プラザ。「本来の日本の味と雰囲気がどこまでアメリカで通用するか」と地元の新聞でも大いに注目されている。

オープンの日にはブラッドリィ・ロスアンゼルス市長も多忙の中をかけつけ、オープニングに花をそえた。

日本情緒たっぷりの店構えとローストステーキ、タタキ、シャブシャブなどの日本、いや、神戸の味とで連日大いに賑わっていて経営者の五明洋さんは当分神戸に帰れないほどだ。

〝六段〟本店／元町通3丁目 中突堤の筋 ☎331－2108

★ホームメードケーキはあっという間に売り切れ

木造りのしっくり落ち着いたインテリアのカウンター茶房「邯鄲」は昨年11月国鉄本山駅北東ダイソービルにオープンし、美人のママ植田延子さんが頑張っている。

店名の「邯鄲」は能楽からつけられ大好評のメニューは手作りのケーキ。月、水、金と出来たてのケーキが宝塚より運ばれる。

あんまり美味しいので、たちまち売り切れてしまうこともしばしばとかで植田さんはうれしい悲鳴をあげている。

好みの珈琲カップで香り高いサイフォン珈琲と手作りケーキなんて優雅なティータイムも神戸らしくていいですね。

午後6時からスナックになります。

（リザーブ¥6500）

神戸市東灘区岡本一丁目 ダイソービル南1F ☎453－4030

★ティンカーベルの次にはピーターパンが登場

マリンビル2階にスナック「ティンカーベル」があるが、そのマスターの藤田和男さんが、昨年12月12日三宮駅山側にレストラン&バーを開店。その名も「ピーターパン」とやっぱり童話の世界。カウンター席の他に落ちつけるボックス席の広々とした店内は、ピアノとベースの演奏もあって大人のムード。安くって美味しくっていい雰囲気だから若い人たちに早くも人気上昇中。

アダルトな雰囲気で

ピーターパン＝生田区北長狭通一丁目幸楽ビル3F ☎332－5997

ティンカーベル＝生田区中山手通一丁目マリンビル ☎391－5447

●神戸うまいもんとドリンキング

カフェテリア

ビアーハウス

三宮・生田新道

☎331－9554

今、若者に大いに受けているのがカフェテリア〝ビアーハウス〟。システムはオールセルフサービス。その場で注文をしてその場で支払うナウなキャッシュシステムがいい。一品料理から神戸肉のステーキまで料理は豊富に品揃え。もちろん、ビール、ウィスキー、ソフトドリンクスの他、コーヒー、紅茶などもいろいろとある。お値段もグッとお手頃。

スッキリとシャレた明るい店内にはいつも素敵な音楽が流れ、窓側の席で恋を語らうカップルの姿も見られる若いあなたの店だ。

お慶びの日に、華麗なやまと髪。

株式会社 美容室 **エリザベス**

本店　三宮神社北東三上ビル２Ｆ　TEL. 331－8894・4917
芦屋支店　芦屋市阪神芦屋駅山側　TEL. 0797－22－4067
お貸衣裳部
花嫁衣裳サロン　東京初代遠藤波津子直流 畑尾芙久子の店
本店美容室エリザベス階上　TEL. 331－3258
専属結婚式場　生田神社会館・オリエンタルホテル・阪急六甲山ホテル・蘇州園地

Hat dog

なんすい
軟水のCoffee
味、また格別。

営業時間　午前10時～翌午前2時

KOBE WATER
神戸軟水の店

コーヒーハウス
ハットドッグ
神戸酒類販売株式会社 １Ｆ
バス停《中山手1丁目》南側角
☎ (078)321-1689

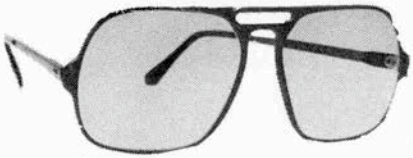
ハイセンスの紳士服で
最高のおしゃれを

三恵洋服店

神戸・元町４丁目 ☎(078)341－7290

MAKE UP WITH ROYAL

スーパー サングラス…



● ランボルギーニ（スーパー サングラス）

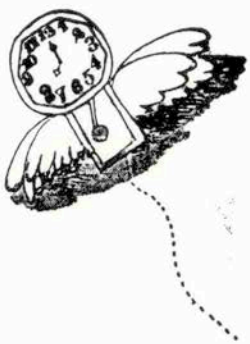
世界で最も速いスーパーカーとして知らない人のないほど有名なランボルギーニがサングラスで登場しました。
名づけて“スーパーサングラス”フレームは車の車体に使われているジュラルミン系スーパー合金をそのまま採用し、強さ、軽さを両立させた機能的なサングラスです。

16,000円

神戸眼鏡院

元町店・元 町 3 丁 目 ☎(321)1212代表
三宮店・さんちかタウン ☎(391)1874～5
元町店は毎水曜日がお休みです
三宮店は第２、第３水曜日がお休みです

神戸百店会だより



★北野クラブでアイク・コールのショウ

「モナリザ」などのヒット曲で懐しい名シンガー故ナット・キング・コールの弟アイク・コールが来日、**北野クラブ**で3月28、29日ディナーショウをする。兄ナットに負けない歌唱力と黒っぽい魅力、「マンダム」の唄でもうお馴染みのアイクだが今回のショウは、ナットのヒットナンバーや、ジャズのスタンダードナンバーを中心に聴かせてくれる。ナットのオールド・ファンにもとても嬉しいステージになりそうだ。

ショウは7時半と9時45分からの2回。ディナー、チャージ、税、サービス料込みで15000円。

お申し込み、お問い合わせは北野クラブまで。☎231－2251

アイク・コール

★元町シラサのオリジナルバッグ

高級バッグ専門店のシラサのオリジナル・バッグはとても評判がいい。牛皮製で、止め具はホックやファスナーなので値段も比較的安く、使いやすい大型なのでとオーソドックスな形なので、ミセスやキャリアウーマンたちが気楽に持てる。

さてそのシラサオリジナルバッグの海外篇が、春より新しく登場。ナニーニというイタリアのメーカーにシラサオリジナルバッグとして特別注文。上等の鞣し皮で止め具もしっかりしたものが使われている。これもやはりオーソドックスな「ハンドバッグ」。色も黒や茶系統とミセスやシックな装いの人向きで四、五万円から。

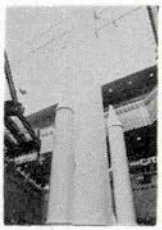
同じメーカーのキャンバス地のショルダーは、カジュアルで若い人向きで値段も手頃。とても軽くて使いやすいと好評だ。シラサ 元町2丁目☎321－0801

シラサオリジナルバッグ

★大阪に新ファッション街なんばCITY誕生

大阪の難波に、119店の専門店を集めた地下2階、地上1階のファッション街、なんばCITYが、昨年秋オープン。神戸の店ではレスポワールフーゲツドウ（喫茶室）、ユーハイム（喫茶室）、リザ、田崎真珠、芸夢、ジョアンナ、一番館、コマツヤが店舗をかまえ、「神戸らしい雰囲気」と好評を得ている。

この街の真中にはB1、1Fをぶちぬいたロケット（日本初の静止衛星きく2号を打ち上げたロケットですって）が、21世紀の街を象徴して立っていて、一見の価値あり。第3木曜定休日。



これがNロケット

●ショップトピックス

★銀行は3時に閉まる、というのはもう随分昔のおハナシ。**太陽神戸銀行**の木店、三宮支店、交通センタービル支店など店外に現金自動引出機の置いてある銀行では、午後6時までOKです。でも引き出してばかりじゃダメだよ。

★ご卒業、ご入学おめでとうございます。**ニューポートホテル**15階回転レストラン鳴戸では、お祝いのディナー「歓火（よろこび）」をご用意しました。出発のお祝いをご家族や、親しいお友だちと港を見ながらどうぞ。

★三宮本通りの北側がビルになるためにただいま工事中。お寿司の**本成駒家**は、朝日会館の斜め北向いの仮店舗で営業しております。☎331－3236。ビル完成は4月末の予定です。

★恒例の**田崎真珠**の展示会が3月6日、7日、8日とオリエンタルホテルで。今年は田崎真珠創立25周年にあたります。この展示会を幕開きに社史の編纂、記念パーティを予定。まずは幕開きのこの展示会、題しまして「序曲――あつい期待――」。人気のメリー重富さん、去年インターナショナルパールデザインコンテストロマンティスト銅賞を受賞した藤井秀二さんのジュエリーをお楽しみください。

★うなぎの**竹葉亭**が移転します。現在より50メートル西、元三映映画館の場所。新しいお店は3月11日開店です。新しくなった竹葉亭で、春の旬味をお楽しみください。現在の場所では、3月4日まで平常通り営業しています。☎331－1120

★2月15日文化ホールで行なわれた第24回日本生花商店組合の兵庫大会に、**中川衣裳店**、**つるや衣裳店**のウェディングドレスを着た美女7人が色を添えました。

ポケットジャーナル

★神戸ポートアイランド博覧会協会が発足

昭和56年春に開催予定の「神戸ポートアイランド博覧会」（愛称「ポートピア81」）の実施団体「神戸ポートアイランド博覧会協会」が設立した。

同協会は兵庫県、神戸市、神戸商工会議所、神戸新聞社の主催4団体で構成されており1月23日オリエンタルホテルで設立総会が開かれた。

同総会には宮崎神戸市長、佐谷兵庫県出納長（坂井県知事代理）、外島神商議会頭、光田神戸新聞社長らが出席、宮崎市長を会長に、坂井、外島、光田各氏を名誉会長に選出した。

一方、全国から公募した博覧会のシンボルマークも決定した。二千八百余点のなかから選ばれたのは京都市のグラフィックデザイナー小代田文男さん（36）の作品で色はマリンブルー。

なお、同協会は任意団体として発足したが、4月初めに正式に財団法人として発足する予定。

ポートピア'81
シンボルマーク

★第6回こうべ市民美術展出品作品募集中

広い分野の作品を一般市民から募集するこうべ市民美術展の募集要綱が決まり4月1、2日午前10時から午後7時までサンボーホール2階で受けつける。

部門／日本画、洋画、彫塑、工芸、書、写真、デザイン
応募資格／16才以上、神戸市内在住または通勤、通学者
応募点数／2点迄。未発表、個人作
出品料／無料
賞／1席神戸市長賞、2席神戸労働者福祉協議会長賞、神戸新聞社賞、3席奨励賞（2点）
問い合わせ／神戸市教育委員会文化課（331－8181）

応募作品は4月6日から11日まで、サンボーホール2階展示場で展示される。

★能・狂言ジャーナル「みやび」創刊

能・狂言の専門紙としてタブロイド版の新聞が創刊された。

日本の古典の現状や情報を満載した、独自のジャーナルの世界を拓いている。

神戸・大阪・京都を中心に愛好者に広く配布されているようだ。3月1日の創刊号を皮切りに、当分隔月の発行とのこと。

この新聞はあくまで中立性を守り、本来のジャーナルとしての立場をとっている。少し変った点は、能会などの催しの番組広告が掲載されるので、この「みやび」を利用してPRするのも、ひとつの方法だろう。

発行　コミュニティサービス㈱
一部　200円

★近代神戸百年の歩みが一冊の写真集に

郷土史家の荒尾親成さん（元神戸市立南蛮美術館長）の編纂になる「写真集／明治・大正・昭和神戸」がこのほど国書刊行会から発刊された（4800円）。

荒尾親成さん

写真が語るふるさとの思い出―と名打った同書はいわば神戸の百年の歩みを目で見ようと280

誕生日ありがとう運動

誕生日の母の願い
―それがあたたかい社会づくりに―

本運動へは、全国各地から毎日二～三十通の郵便が送られてきます。先日こんな手紙と献金がとどきました。

「みなさまお仕事大変でしょうが、ぜひがんばってください。

こどもが、二月二十八日で八才になります。泣き虫で勉強もできませんが、心のやさしい困っている友達に手をさしのべてあげられるようなこどもに成長してくれる事を願いつつ、みなさまのご活躍と発展を祈りつつ、少額ですが何かの役にたってくれることを願っています。」（神戸市北区主婦）

本運動では、献金や古切手を寄せられた方へ、運動参加カード（幼児用と成人用の二種類）を送ります。その幼児カードの欄外に「このカードを誕生日記念アルバムや育児日誌におはりください」と記しています。

それは、このおかあさんと同じ願いを、わたしたちが持っているからです。この子が成長して、自分のアルバムをめくる時に「○才の誕生日には、おかあさんが、こういう運動に参加させてくれたのか」と母の願いをしっかり受けとめてくれるでしょう。そして、自分の心の中にあるやさしさ、人間らしさに点火して、みんなと手をつないで生きていく人生をきり抜いてくれることでしょう。これが高福祉社会づくりの第一歩だと信じて、運動を進めています。

誕生日ありがとう運動本部
651 神戸市葺合区御幸通八―一―六
神戸国際会館一階の郵便局の隣
電二五一―八一六一　内線三一六

枚の珍しい写真に平易な解説がつけられている。

内容は、神社・仏閣、官公衙、神戸海軍操練所跡、神戸開港—外人居留地とホテル、神戸の異人館、交通、活動写真、湊川と新開地、芝居と遊廓、元町商店街、名所・旧跡と学校、明治・大正の遊園地、灘の酒倉、有馬温泉、天災と人災、祝賀行事と博覧会などで、一枚一枚の写真が貴重な資料だ。A4変型上製函入168頁

★ハワイアン・フェスティバル　6月に神戸で

昭和9年、神戸商大の学生で、村上一徳というスチールギターの名手がいた。彼、イットクさんは、自己のグループ、プリムローズハワイアンやサザン・クロス・カレジアンズで、コンサートやレコード吹込みで活躍。セミプロの村上は草創期の日本軽音楽界においてスチールギターを広く認識させた特異なミュージシャンであった。

アロハ・アイランダースも出演

その村上一徳氏ゆかりの地神戸で、関西ハワイアン協会〈井植貞雄会長〉が主催して6月24日(日)「全日本ハワイアンフェスティバル」が開催される。ハワイアン愛好者が多い神戸ならではの企画で、プロデューサーの末広光夫さんは「イットクさんの貢献は非常に大きい。イットクさんを讃える意味からも、神戸でハワイアンを愛するアマチュア音楽家が一堂に会して演奏会を開くんです」と話す。ゲストにバッキー白片、エセル中田らハワイアン界の第一人者たちを招く予定で、コンサート形式、野外パーティ形式などにした多彩なプログラムを計画中。会場はオリエンタルホテル。

★椎名麟三文学碑建設に一般の協力を呼びかけ

姫路市出身の作家、故椎名麟三氏の文学碑建設の運動が、建設委員会世話人代表の田靡新さん（作家）らの尽力で活発化している。3月28日は椎名さんの7回忌に当たり、目下、文学碑建設資金の募金を広く一般に呼びかけている。

なお、同文学碑は岡本太郎さんの制作で、5月末日に姫路市書写山ロープウイイ公園または姫路公園に設置される予定である。

〈募金目標額〉五百万円（一口千円）
〈送金方法〉郵便振替／口座番号・神戸8665、加入者名・椎名麟三文学碑建設委員会。銀行振込／太陽神戸銀行姫路支店市役所出張所、口座番号・300067椎名麟三文学碑建設委員会石田高義。なお、銀行振込の場合は、事務局あて金額、氏名を通知して下さい。
〈事務局〉電話0792（23）1101内線554姫路市民文化協会

★指揮者朝比奈千足さん　神戸で初のタクト

クラリネット奏者の朝比奈千足さんが指揮者として昨年7月に大阪でデビューリサイタルを開いたが、こんどは若い同志とともにオーケストラを結成して、4月6日、神戸文化大ホールで「フレッシュ・コンサート」を開催する。

朝比奈千足さん

神戸っ子の朝比奈さんにとって、地元でのデビューコンサートになるが、世界でもめずらしい親子二代の指揮者の誕生ということになる。当夜のプログラムはメンデルスゾーン「序曲・フィンガルの洞窟」、ベートーベン「交響曲第一番」プリッテン「シンプル・シンフォニー」。

入場料／前売・1500円　当日・1800円

美術ガイド

★県立近代美術館
第7回兵庫県美術祭　3／3～3／31
金山平三・日本の自然を描く　2／27～3／31

★KCCアートギャラリー
正元直作陶芸展　3／1～3／14
元川嘉津美個展　3／17～3／28
越前焼陶芸展　3／31～4／13

★KCCギャラリー
原田茂子書道展　3／2～3／8
六美会展　3／9～3／15
第15回松井香瑤塾日本画展　3／16～3／22

★ギャラリーさんちか
国画会写真部小品展　3／8～3／13

★新光ギャラリー
骨董レコード展　3／1～3／11
備前焼展即売展　3／15～3／26
越前焼陶友展　3／29～4／3

★シティー・ギャラリー
菅井汲展　2／27～3／20
関根伸夫展　3／20～4／7

★ギャラリーあじさい
虎遊小品展（彫刻と洋画）　3／13～3／18
陶と日本画三人展　3／20～3／25

★キタノサーカス
中田誠個展　3／18～3／31

★芦屋ギャるりーりべるて
ブラジリエ石版画展　3／17～3／25

★そごう神戸店美術画廊
安井賞受賞作家展　3／2～3／7
宗家11代高取静山母子展　3／9～3／14
岡田又三郎油絵展　3／16～3／21
万古焼の新鋭・堀野証嗣茶陶展　3／23～3／28

★三越神戸店アートギャラリー
現代日本画秀作展　3／27～3／4
近代巨匠陶芸展　3／6～3／11
現代油絵巨匠展　3／20～4／1

★知的遊戯の仕掛ばなし

ゲームの持つ、マジックの持つ、ミステリーの持つ魔力に捕えられた松田道弘さん（43才東灘区住吉宮町6ノ15ノ18ノ312）が、ラジオ関西レコード室長を、19年9カ月目に脱サラ。在籍中から手品の本「クロスアップ マジック」（金沢文庫）「シルク奇術入門」（日本文芸社）といった手品実用書を手掛け、一昨年ちくま少年図書館から「奇術のたのしみ」を発刊。山田正男、羽仁進、永六輔氏らが激賞。それを機にライターとして独立した。この程発刊された「トランプのたのしみ」は基礎から、カードプレヤーとしての真随を知る好著。4月にミステリー評論「とりっくものがたり」（筑摩叢書）から、ボードゲームの本を年末にと、松田さんは守備範囲を一つ一つ具体化して、読者を知的ファンタスティックな異次元へ誘ってくれる。

松田道弘さん

★ジュリー&井上バンドの神戸コンサート

実力、人気№1の〝ジュリー〟こと沢田研二が恒例スプリングコンサートを4月4日神戸文化ホールで開く。バックが今やニューミュージックの旗手井上堯之ひきいる個性豊かなメンバー6人のバンド。うち、多彩な音楽活動を繰り広げている井上堯之＜ギター＞を始め速水清司＜ギター＞、羽岡利幸＜キーボード＞の3人が神戸出身。また「サミー・ボウ」（作詞・阿久悠、作曲・大野克夫／ウォーターレコード）を俳優田中邦衛と競作で歌って話題の大野克夫＜キーボード＞、そして鈴木二郎＜ドラムス＞、佐々木隆典＜ベース＞と最高のミュージシャン揃い。春はサウンドから。

2時半、4時半。
入場料（A）4000円（B）3500円　お問合せは ☎331－9078 H・A・Dまで。

花時計

香西精先生逝く

世阿弥学者として全国に名を知られていた、香西精（くわにせ）氏がこの1月12日に逝去された。東大で英文学を専攻され、甲南高校で英文学を講じられた香西氏はすでに世阿弥研究に深い造詣をもたれていた。この頃に影響を受けた1人に武智鉄二氏がいたということである。

私が初めてお目にかかったのは昭和31年頃である。その頃「研能通信」という能の新聞を編集していた私は香西精氏から滔々と「世阿弥論」を聞かされその研究の深さに驚倒したものである。そこで4百字程のコラムで能楽寸註というものを書いていただくことになった。

ある日、先生から電話があって、東京から表章さんという法政大学で能の研究をしている先生がくるから同席したまえと誘われてお2人の話を拝聴したものである。その日の香西氏は本当に楽しそうだった。

それから「世阿弥新考」や「続世阿弥新考」が上梓され「能謡新考」と矢継早に著書が出され名実とも世阿弥研究の第一人者として、高く評価された。香西精氏の社葬で弔辞を読まれた表章さんは本当に残念だったと思う

私も先生の薫陶を受けた一人としてその心を生かしたいと誓っている。

＜小泉康夫＞

●KOBE POST

★第24回神戸二紀展が兵庫県民アートギャラリーで開かれて、田村賞に**伊藤悦子**さん、兵庫県知事大賞に**谷口和市**さん、神戸市長大賞に**宮田廣**さん、神戸新聞社大賞に**高田卓和**さん、同入賞に**桜武春**さん、えびら賞に**高崎研一郎**さん、作家賞に**宮地孝**さんが選ばれました。市民賞は**岡本雅史**、**島よし子**、**大熊左右吉**、**森沢達夫**、**松下満弘**さん、元町画廊賞は**滝本周造**、**梶滋**さん、神戸青年会議所賞は**東山嘉事**さん、六甲ライオンズクラブ賞は**上西良一**さんでした。

★カメラの**大山洋治**さんと木彫の**大山昭子**さんご夫妻が移転。〒563 大阪府池田市浜谷3丁目9番20号 ☎0727（51）1072

★作家の**武田芳一**さんは、大正十年・川崎三菱大争議を描いた〝熱い港〟を太陽出版より発刊。武田さんは2月末に中国へ2週間の旅に出られました。定価2千円

★神戸女子大学、神戸女子短大など行吉学園の理事長として女子教育につくされた**行吉国晴**さんが1月14日78才で他界され、2月3日学園葬がとり行われました。

★デザイナーの**港野千穂**さんが2月7日早川良雄デザイン事務所を移転。新住所は〒162 東京都新宿区住吉町49グリーンヒル市谷301 ☎3513956

★神戸市生田区下山手通4－27（国鉄元町駅東口、鯉川筋北上る冨士信ビル西入）に**向井修一**さんが2月3日より、現代美術の特に版画を中心にした「CITY GALLERY」をオープン。一週目は「現代の声」2／27～3／10「菅井汲」3／20～4／7「関根伸夫」展を開く。

★詩人の**今井美沙子**さんがサンケイ出版より「遥かなる約束」（800円）を発刊。九州五島の掛塚聘堂を老大工が建てた姿を描き、その資料展が1／23～1／28ギャルリーキタノ（福野輝郎）で開かれた。

★**アサヒファミリーニュース社**（重森守編集長）の事務所が移転。〒530 大阪市北区中之島2－3－18 新朝日ビル7F

G　それは　GREAT
G　それは　GOOD
G　それは　GENTLE
G　それは　OKADA　TAILOR

ADAM G

そして……ADAM.G
それは……現代を着る貴男のためのファッション砦です。

服飾技術研究所
"アダムG"　**岡田　厳**
〒651 神戸市葺合区御幸通り6-1-15みゆきビル607号 ☎(078)221-9314

第3回神戸女流文学賞受賞作品

夢の消滅 3

大原由記子
え・南和好

冴子はあらためて自分のデザインと配色がまちがってなかったことを確信した。細い体にはゆるやかな線が中性的な魅力を加えているし、実桜のはっきりした目鼻だちには淡い中間色が品位を与えているようだった。そして何よりも気に入っているのは、布地の薄さと柔らかさだった。色とデザインが豊かなものであっても布が繊細な感触でなければ、実桜の優雅な美しさはかえって淫乱なものに変化しそうだった。処女と娼婦の両方に共通す

る部分を実桜に与えてみたかった。どちらにより近く見えるかは、見る者の自由である。

しかしこうして間近かに危険なコスチュームを自然に着こなしている実桜を見るとき、実桜の中で意識せずに存在する透明な部分を感ぜずにはいられない。たいていの女は不透明な部分を多く持っていて、その部分が個性あるいは存在感を感じさせる。だから似合う色、形というものを多かれ少なかれ持っている。しかし実桜は色や形にこだわらない。自分の皮膚の一部のようにたいていのものに同化してしまう。

「あとで髪を結ってあげるわ。横の髪をカールして中世の婦人のようにたらすとかわいいわね」

「Sは何着るのよ」

「私はラメの入ったグレーのドレス」

「ふうん、いったいSの恋人はどんなスタイルで登場するのかしら」

「彼は関係ないわ。彼に映る私たちには興味あるけど、彼自体にはそれほど意味がないわね」

夕方近くになると幾分雪は小降りになった。雪の気配は柔らかな羽根が空に舞い上るさまにも似て、不可思議な倦怠感と興奮を冴子と実桜に伝えていた。何かどうしようもない感情の波がそこまでやって来て二人の足元をくすぐりそうだという予感が、薄暗い部屋のなかで不気味なほど息づいていた。実桜はソファーにだらりとかけ窓の外を覗いていた。顔半分が雪明りに仮面のように浮き上っていた。冴子は実桜の髪を仕上げると、うきうきした様子でポトフーとサラダを台所から運んだ。くずれかけた肉とじゃがいもの色は不思議なほど黒薔薇の匂いのするこの空間と調和していた。

十時を少し回る頃、冴子と話しながら小木一央（おぎかずお）は居間に入ってきた。実桜はふり向きもせずに窓辺で、ブランデーを飲みながらマラルメの詩集を読んでいた。小木一央は実桜の存在を無視しながらも柔らかな視線を窓辺に向けていた。闇の奥を抜けてきたものなら、淡い色をまとった二人の女の存在は刺激的にちがいなかった。

「美大の大学院生の小木一央さん、あなたのなめ前の部屋が彼の部屋になるのよ」

「片瀬実桜さんは英文科の三年、私の後輩なのよ」

「魔女の館みたいだね」

一央は腰をおろしながら低い声で言った。

「私たち煙草を切らしちゃったわ、持ってんでしょ」

一央は枯草色のショルダーバッグから煙草を出し目を細めて吸うと目の前の冴子に渡した。冴子はアルコールのためかいくらか上気した素振りでそれをのむ。のむとひょいと実桜に回した。

「何だか煙にまかれてるみたいだな。ここにやってくるまでは半信半疑だったけど、君たちを見てるとまんざら人魚の伝説もうそじゃないと思えてくるよ」

「これからいっしょに生活するのよ。そんなこと言ってられなくなるわ」

「いつまでいる気なの」

実桜はいたずらっぽく頬笑みながら言う。

「何だか君はぼくがきらいみたいだ。だから君がぼくを好きになってくれるまでというのは」

「あたし誰も好きにも嫌いにもならないわ」

実桜は不愉快気に髪をかき上げた。束ねられた髪はほろりとこぼれ幾本か肩に下った。冴子はスタンドの灯を消して蠟燭を灯す。橙色の炎が暖炉とテーブルの上で揺れる他はまったくの闇に等しかった。三人の顔が闇に切りとられた生首のように浮き上った。冴子はもったいをつけて飾り棚から和紙を三枚とり出した。

一、いかなる感情の交流も自由であるが、原則として互いに平等であることを旨とする。（AがBにある特定の好意を示したとき、AはBにCにも示さなければならない）それがめんどうであれば空気になりなさい。

一、この共同生活が継続している間は、第三者をここへ呼んだり、しゃべったりしないこと。

一、あとはまったくの自由である。

「S、守らないといけないの」
「規則は破られるために作る必要があっただけ」
「君の意見はいつも逆説的だな」
「本当のことはいつもウソくさいってことよ」
「じゃあ我々は偽の生活を本物らしい顔してはじめようってわけだな」
「そうよ。SとMと、あなたはさしずめKね。そう呼び合いましょうよ、いい」
軽くうなずく一央に冴子はにこやかにウインクする。
「これで共犯者になったということね」
「ねえ、じゃあ血判を押しましょう」
「Mは子供っぽいこと言うんだね」
一央はたのしそうにポケットからナイフを出して蠟燭の火で焼いた。三人は三枚の和紙に血判した。
カーテンを引くと暗いと思われていた部屋がぼわっと明らんだ。さっきまで止んでいた雪がまた降りはじめ、部屋のなかにいても雪を被りそうだと冴子は思う。しんしんと流れる雪が頭に胸に手にふりかかる気がする。何光年も彼方の宇宙の神秘を、生まれては死に死んでは生まれる人間の業の深さを、雪は知っているのだと冴子は思う。物心ついた頃にも雪は同じような白さと冷たさで降っていた。いったい人はいつまで苦しさをひきずりながら生きつづけているのか。
「入っちゃあいけない、お嬢さま」
雪が乱れて降っていた。予感のようなものに急き立てられて、否本能的に恐怖を雪のなかから嗅いでたのかもしれない。ランドセルを投げすてると母の部屋にすっとんでいった。父は二、三日家をあけていた。母は泥大島に錆朱の博多帯をしめ、横たわっていた。目はまっすぐに天井に向けられて、うつろに輝いていた。ぐんなり冷たくなった体のなかで、ただ目だけが過去への執着に、生きているようだった。「何を見てるの」母の物憂い目差しが、自分に向けられていないことは、幼な心にもすぐわかった。何か正体のわからぬ敵の前ですべもなく立ちすくんでいるとでもいいたげな様子だった。蒼白い顔にくっきりひかれた紅が美しく、母の側を離れがたかったその日以後、母の面影はぷっつりととぎれてしまった。童話を聞かせてくれたり、髪にリボンを飾ってくれた母は過去の柔らかな膚ざわりにもぐりこみ、死の一瞬に見せた美しい母の姿がかさぶたのようにできてしまった。七年の歳月、自分の側にいた女は本当に母であったのか疑われた。事実、翌年には新しい母ができた。肉質のさっぱりした気性の彼女は、すぐに無口な子供と仲よくなった。無口な子供も彼女の前ではよく笑った、甲高い声で。
「まだ眠らないの」
「Kは」
「ぼくは今夜は徹夜で描かなきゃいけない」
小木一央は自分の肩のカーディガンを冴子の肩にかけた。一瞬一央の匂いに冴子は包まれた気がした。柔らかで素朴な植物の匂いなのか、油っぽい絵具の匂いなのか曖昧だった。
「今夜の儀式は楽しかったけど、冗談が過ぎてるように思えたよ」
「承知でここへ来たはずよ」
「危険な遊びだ。ぼくらはまだ若い、君たちが傷つくよ」
「あなたは」
「ぼくは男だから、君は磯村医院の一人娘だし、噂になれば君だっていい気はしないだろう。」
「故郷は遠いわ」
「どこでMと知り合ったの」
「あなたの好みでしょ」
「まじめに答えて」
「どっかの街角から拾ってきたと言ったら信じてくれるしかし現実はそれほどドラマティックじゃないわね。私の父とMの父は友人だし、家も近いし、学校もいっしょだったってわけ」
「あなたも正体不明のとこがあるけど、彼女も正体不明

摩訶不思議って感じするね」
「彼女に惹かれた？」
「さあどう答えたらいいか、とんでもない館に足をつっこんでたじたじって感じ。何せいっしょにくらす二人は魔女だもの」
一央は冴子をぎゅっと抱きしめてキスした。一央の体は小刻みに震えているようだった。

「二人だけでくらそう」
柔らかな唇が冴子の耳もとで何度も囁いた。

二月に入ると大原はますます寒さと白さに包まれた。実桜は後期の試験やレポート書きで外泊することが多くなり、一央は春にＲＭＣ会館で開かれる一陽会の展覧会で三十号の油絵を出品することになり、夜遅くまで自室

にこもっていた。そして冴子は同人雑誌の編集でホテルにとまりこんで仲間と打ち合わすことが多くなった。時は三様に流れていった。他人が同じ屋根の下で生活する不自然さは、徐々に溶けていった。

一央は灰色の絵具をパレットに出した。ドアの向こうに人の気配がしていた。床が弛む音がし、やがて向こうのドアのかなたに音は消えた。冴子なのか、実桜なのか廊下を隔てると誰が帰ってきたのかわからなかった。時計は五時を少し回っていた。疲労感が腕や頭の芯にあった。夕方からずうっと筆を持ちキャンバスとにらめっこしているに等しかった。いくつもイメージはわき上がり構成もでき上ってるはずだった。しかしいざ色と形でイメージを表現しようとするとき、筆は容易に動かなかった。何か綿毛のようなものが神経を逆撫でして、素直な表現を押しとどめていた。一央はここ一週間近く同じ焦燥感にかられていた。眠気が体の奥の方でうずいていた。

引き出しから睡眠薬をとり出して飲んだ。懐しいような思いで一央は眠りにもぐり込んでいった。睡眠不足で腫れていた目蓋は重い扉のように閉じられた。頭痛がうすらいでいき、体がますます重くなっていった。ベットにのめり込みそうなくらい重心が下っていった。

真白い雪が木立や沼やハイウェーをすっぽり包んでいた。見上げるとうすぐらい空には白い鳥が飛んでいるようだった。彼は四角い窓から顔をつき出して外を見ていた。もう長い間。

彼は恋人（彼はその女について何も知らなかった）が窓の下を通ることを知っていた。いつもの散歩の時間はとうに過ぎていた。彼はいらだっていた。四角の空間のどこもここもあまりにも白すぎ、個々の存在を消滅させていた。彼は真白な糸杉の雪がどさっと落ちる音を聞いた。

透明に凍った沼を横切り坂を上ってくる女の姿を見つけた。よくよく見ないと白さに埋もれてしまうほど女の姿は弱々しかった。彼が二息つく間に女は窓の側に上ってきた。女は何も着ていなかった。彼は雪道を歩く女がなぜ何も着ていないのか不思議には思わなかった。彼はそれが夢であることを知っていた。夢のなかで、夢なんだなあと思うことが幾度かあった。不自然さが彼に現実ではないと気づかせるのではなく、夢を見はじめると夢のなかの目のようなものが起き出し、映画かテレビのように「夢」という物語を見はじめるのである。しかし夢だと知ったからといって物語のリアリティーがなくなるのではなく、彼はますます本気になって夢にのめり込んでいくのである。目は目でどこかちがうところで彼を含めた夢の登場人物をながめているのである。

彼は女に服をかけてやろうと外に出たがっている。しかし身動きがとれない。おそらく狭い箱のようなものに彼はとじこめられているのだろう。もう少しで箱から出られるのだが、彼は力いっぱい箱を破りやっとの思いで窓から外へ出る。

女は雪原に俯せて倒れていた。彼は抱きおこして顔の雪を払ってやった。彼は体温で女を生きかえらせてやりたかった。

彼は女の頬に唇を近づけた。女の肉体は冷たく接触感がまるでなかった。「あなたは誰なんだ」彼は尋ねた。女は黙っていた。遠目には冴子にそっくりだった。冴子を抱いているはずだった。しかしよく見ると目も鼻も口も実桜のものだった。実桜かもしれない、彼はふとそう思った。しかしこの冷たさの中では抱きしめること以外に、白さのなかから女を助けることはできなかった。女の体は重みもなく彼の胸に凭れていた。かすかに果実の匂いが鼻腔を刺激していた。この香りは冴子のものでも実桜のものでもあった。彼は二人の女を抱きしめている気さえした、がもう一人がどこにいるのかわからなかった。雪がはげしく降りはじめ思考を鈍らせていた。〈続〉

忘れられない幼い日の
美しい思い出

桃の節句

ひなまつりケーキ
で 祝ってあげて下さい

北欧の銘菓
ユーハイム・コンフェクト

■本社・工場・熊内店　神戸市葺合区熊内町1－8(南蛮美術館東隣) TEL 221-1164
■三宮センター店・さんちか店・大丸・そごう・阪急・三越・神戸デパート・元町店

陶　芸
古川軒

ニューセンタービル
(三宮センター街1丁目)
電話(078)331－2813

第3回神戸文学賞受賞作品

自由と正義の水たまり

第3回
蒼竜一
え・小西保文

夕方、バアの止り木でウィスキーを飲みながら、尓(ボカ)は就任したばかりの大学助教授の友人を待っていた。友人が来る迄にかなり酔っていたいような気持のもと留学生は、彼自身が考えている程度以上には既に酒を飲んでいる筈であった。が、その量に反して彼の期待したようには、酔は廻って来ないのだった。

嗚呼、降って湧いたように子供が殖える。まさに青天の霹靂。尓はこんな場合にこの言葉を使うことが適切かどうかちょっと気に掛りながら、また酒を註文した。

ソフィに子供が居たなんて、夢にも考えなかった。どうして中絶しなかったのだろう。そりゃ、アメリカで無理なら、と言ってもサンフランシスコでなら、そんな医者も見つかろうというものだが。まして、日本に飛べば一石二鳥——。いやこの使い方は可笑しいが、観光旅行と中絶が一度に出来ると云うもの。物騒なことをしなくとも、ぼくとあのまま一緒になって居りさえすれば至極簡単。ぼくは子供を好きだし、それに彼女との、少なくとも寝室での生活なら旨く行っていた筈だ。そりゃ喧嘩もしたさ。しかし、そうやって生きて行けたじゃないか。だのに、ソフィは、ぼくを去って、他の男と結婚して置きながら、ぼくの子供を産むなんて、一体どう云うつもりなんだ。それも、三年間も音沙汰なしで、突然亭主と子供を連れて来て会いたいだと。混血の子供が邪魔になりだしたので自分に押付けようと云うのか。それこそ一石二鳥——観光旅行と子供の始末を同時につけるつもりなんだな。それとも結婚式を挙げて日足らずで出来た子が、黒い瞳の黒い髪の子供だったので、女房を責めて父親の名を吐かせたあげく、報復する為にやってくるのか。それなら場合によってはパンチの一発も喰らうかも知れないし。それとも慰謝料だとか養育費だとかの名目で、金を取りに来るのかも知れぬ。もちろん、払う金はありゃしない。だったら子供は置いてゆく。最低限、この覚悟だけはして置かねばならないようだ。後は出たとこ勝負だ。尓はようやく結論らしきものに到達した。

彼に酔いが回り始めた。煙草を取り出し、一服つけたところで、苦労して数学の問題を解き得た時のような充足感が、一瞬彼の心を満たしていたのだった。

「少しヴォリューム、大き過ぎるようだけど」

尓はバーテンに店内の音量について註文をつける迄に余裕を取り戻した。

その時背後に、やぁと言いながら遠い山を見詰める風な目付きをした新進の大学助教授が立っていた。学生時代、尓が剣道をやっていた頃、師範から遙かな山を眺めるように視線を据えよとよく言われた。そんな時、彼は

すぐ運動の嫌いなこの友人の目付きを羨望の念で思い浮かべたことがある。

「変っていないな、先生」

友人は、微笑を浮かべながら、尓の横に腰を下ろした。

「大学の助教授と言っても雑役夫さ、毎日、忙しくてね」

尓は、今自分の言った、変っていないなと云う言葉を友人が如何解釈したのかと思った。友人は、徐におしぼりで手を拭いていた。何処か気負いのようなものを感じさせる処も、変っていない。

尓は、何を飲むかと友人に訊いた。友人はバーテンにその返事をしたあと、向きなおって眼鏡を外し顔を拭きながら（尓は、拭き方が手と顔と逆ではないのかと見ていた）

「ところで、奥さんと子供さんは元気かね」独身の、多分女をまだ知らない助教授が尋ねた。

「あッ？　元気なことは元気だが……」

「元気だが、とは？」

友人がゼミの学生を見詰めるような目付きで、彼の顔を覗き込む。

「いや、ちょっと……」

ちょっと、何処かが可笑しいとは思った。

自分は酔っているな。あの結論には女房と子供のことが欠落していたではないか。完全に、とは言わない。でも、出たとこ勝負だなんて、タカを括って居られるような問題ではない。自分は、もしかしたら、妻も子供も失う破目に陥いることだって有り得るのだ。よしんばそうでなかったとしても、自分の息子が――、そう、純粋の黄色人種の息子が物心付く頃になって、突然白人との混血児の兄が出来ていたら、それを一体どう受け留めるだろう。それに女房だって、血の繋りの無い子供の下着を洗ってくれたり徒でもそんな仕事は好きな方ではないのに、食事を作ってくれたりするであろうか。

尓の最前まで乗っかっていた考えは、根底から引っくり返ってしまった。彼は再び強迫観念のようなものに襲われ始めていた。また下痢をしそうだ。

「実は、私も近々に結婚しようと思ってね。君も知ってるだろう。T教授の紹介だから、断われなくってね。相手はK産業の取締役の一人娘なんだが、大切にされて育った所為か、おぼこいのでこちらが途惑う位なんだ」

そんな女に限って、あの方は案外好きなのかも知れないと尓は一瞬思い、また自分のことに引き戻されて、

「血の繋りというのは、いったいどういうもんなんだろう」

この話題を助教授は疑いもなく自分の結婚話の続きであると理解して、

「血の繋りか。不思議だね。血の繋りのない男と女が結婚して子供が出来る。その子供の中で初めて血が繋る。だから、法律で云う一親等は合理的じゃないね。父と子、母と子はそうであっても、血の繋りがない夫と妻を同等に扱うのはおかしいよ。その証拠に離婚したらどのような関係も無くなってしまうんだから。消滅するようなものを一親等と規定すること自体が可笑しいの

さ」

尓は、法学部の変っていることで名高い老教授の会議か何かの折の茶呑み話の受け売りの類だとはこの場合考えたりせずに、友人の話に引込まれて行った。

「親と子の繋りは切れないかな」

「だろうな。この間、医学部の助教授に傑作な話をきかされたよ。産婦人科にお産のために入院していた新妻に赤ちゃんが産れた。所謂ハネムーン・ベイビーだ。家族はみんな大喜びで、中でも特に若い父となった男は会社を休んで来てた訳だけど、嬉しいのか落ち着かないのか病院の赤電話を使ってあちらこちらに電話の掛け通しだったと云うことだ。ところが、その嬰児を取り上げた先生が腑に落ちない。我が目を疑ったと云う話だ。どうもおかしい。どうしてもその嬰児が日本人夫婦の間に生まれた子供とは思えない。でも大層みんな喜こんでいることだし、うっかりしたことも言えず、カルテを取り出しては、夫二十四歳、妻二十一歳。もちろん、母親の顔には似ている。自分がとりあげたのだから疑う余地なしさ。しかし、可笑しい。それは考えられないことだと云うんだ。いや、身体上の欠陥があったと云うことではない。その子が確かに二人の間に出来た子ではなかったと云うことなんだよ。私同様独身のこの医学部助教授は思案に暮れたと云うことだ」

「それで……」

友人は喋り過ぎたのか、酒で喉をうるおし、尓はソフィ夫妻を、この話の若夫婦に置きかえてこの話を聞いていた。友人は、自分の話術がかくも尓の興味を引きつけていることに少なからず満足しながら、

「そのうちにだ。男の方の親達が、どうも可笑しいと云うことに気付いたから堪まらない。怒鳴り込んで来たさ。子供を取り違えたと。うちの息子に、こんな黒人のような子が出来る筈はない。これは、てっきり大学病院の落度だと言って、新聞で問題にするとまでいい始めた。男の親から見れば、なるほど自分の息子に全然似ていないと云うのも無理はない。先生、そう思った途端、これはてっきり父親違いの子だと云うことに気付いたって訳さ。ところがその父親がさっぱり分らない。女の親に聞くと結婚する迄、全然男っ気がなかったと云うし、結婚してから仲の睦まじいこと、近所でも羨む程だったと云うじゃない。今度は女の親達が怒り始めた。言い掛りだと言って、成程女の親達から見れば、娘に似ていることは誰の目にも明らかなんだし、そこは身内の贔屓目さ。中間(なか)に立った先生、すっかり困ってしまってその時まだ入院したままの女にそれとなく聞く訳だが、彼女はベッドに俯伏して泣くばかり……。ちょうどその頃看護婦が休暇をとってグァム島へ遊びに行くと云う話を小耳に挟んだ先生、察する処あったと見えてすぐ女のもとへととんで行って、新婚旅行は何処であったかを聞いたって訳さ。そこで何かが、(後は言わずに学究の徒として上品な微笑を口元に浮かべている)」

「全く、気の毒な話さね」

尓はこの女のことを偽りなく気の毒な話だと思いながら、その一方ソフィについてはどうして気の毒だとはこれぽっちも思わなかったのか自分でも不思議に感じた。そして、いま自分がソフィのことを話したらこの友人はやはり気の毒な話だと云うのじゃなかろうかと思いながら、

「それにしても軽率じゃないか。若いとは言っても日本に帰って中絶するとか何とか手を打てた筈じゃないか。それをしなかったのは、その女にも責任がある。破局は回避出来たのに……」

尓は、ソフィを念頭において喋っているような気がした。その言葉は、女の子の代りに、ソフィと置き換えたら、今の彼が叫びたいような気持でもある。

「破局はすぐにやって来た。まず、あんなに子供が出来たと喜んでいた夫が、妻子のもとに寄りつかなくなってしまった。気の毒に思った先生、施設に子供を預けたらと勧めたらしいんだが、もちろん女の親も米国領事館に

行ったりして早く子供を始末しようとしたらしいんだが、今度は娘が子供を手離さなかった。結局、離婚するしかなかったようだね」

尓は、女の方の立場でなく、男の方のソフィの夫の立場を考えていた。

「君ならどうするかな」

友人は、愚かしい質問をする奴だと言いたげに、それでもゼミで出来の良くない学生に取摑った時のような忍耐強さを見せて、

「やはり、離婚するのじゃないかね。それがお互いにとってこれからの人生を生きて行く上での正しい判断だと思うがね。忌まわしい過去を引摺って生きて行くなんてことは、賢明なことではないね。女と別れない限り男にとってそのことは忘れ難い屈辱的なことだし、女もまた絶えずそんなことを意識させられたんじゃかなわないだろうしね。」

「そうだろうな……」と言って、尓はやはり自分でもそうするだろうな、と思いながら日本人の子をソフィが産んだ時、ソフィの夫は別れようとはしなかったのだろうか、結婚した相手の女が他人の子供を産むのを、ソフィの夫は何様な気持で受け留めたのだろうかと考えた。やはり、男にとってそれは屈辱的な事ではなかったのだろうか。いくら開けたアメリカでも少くとも名誉なことではなかった筈だ。尓は急にソフィの夫に対して、取り返しのつかぬことをしてしまったのは、自分ではなく実はソフィなんだと云う気持がした。

「ところで、その子供の方は如何なったの。元気で育っているのだろうか」

友人は、そろそろこの話題を切りあげたいような響きを語尾に感じさせながら、尓の話を無視して強引に結論へと持って行く。

「世の中うまく行かないものだね。このケースでは、まず胎児が人間の形を整える前に自然にかあるいはまた人工的にか秘密に閉ざされたまま闇に消え去ってしまうことが第一の最善策。次は、生まれて来てしまった以上仕方が無いようなものの、まだ嬰児のうちに肺炎か何かに罹って病死すること、可哀そうなようだが、これが第二の次善の策。第三は、父親の黒人にその子を引きとらせ里子に出すか施設に預けるかして養育費を負担させること。もっとも強姦した黒人兵がそう簡単に見つかる筈はなかろうがね」

「結局、三つとも駄目じゃないか」
「そうだ。今のところは駄目だ。でも第二の場合だけは残されている。将来そのようになるかも知れないし、またならないかも知れない。とにかく今は、若い母親が頭髪の縮れた唇のめくあがった黒い赤ん坊（ソフィの場合は髪の黒い、鼻の低い、黄色い赤ん坊）を育てていると云う話だ。結局、どんな子でも親と子の血の繋りは切れないと云うことさ」
　話をうまく元に戻した友人の大学助教授は、美味そうに酒を飲んだ。尓は、この話の最初の傑作な話を聞かされたよ、から始まって、第一の最善の策とか第二の次善の策とか、国文学の助教授にしてはずいぶん乱暴に言葉を使うものだと半ば感心しながら、どう転ってもこのような星の下に生まれて来た子供の邪魔物でしか有り得ない無惨な生を、図らずも目の前につきつけられたような気がした。劫初から死ぬことを期待されている子供、そして、吾が児がそうではないと言い切れないこの父親は、この夜酷く悪酔せずには居られないものを感じていた。一方の子に対しては、その子が死んだ時のことを考えただけでも震えあがる。なのに同じ自分の血を引く他の子に対しては、なぜ中絶しなかったのだろうとか嘯いて、ひそかに死んでくれていることを希っていた。尓は顔から血の気の退いて行くような気がした。
「どうしたんだ。急に深刻に考え込んだりして、なんだか顔色が悪い様だが、大丈夫かね」
「ああ大丈夫だけど、今の話、妙に気になってね」
　助教授は微笑を含みながら、満足気に、煙草を口に咥えた。尓は、トイレに立った。再び下痢。てっきり神経症的な下痢だと思った。顳顬の辺りで血管が太い蚯蚓のように怒張して跳ねてるような気がする。尓はトイレの水道で何度も顔を洗い、ハンカチで顔を拭きながら、カウンターに戻った。友人は、パーテン相手に今度は戦争映画の話をしていた。彼の話は、いつも意識的に論理の筋を通そうとする処があって、パーテンの劇画的なバビューンとか、ヒューとか云う言葉と不思議なほど嚙み合わないのだった。なのに二人はどちらも話を合わせているつもりなのか勝手なことを喋っている。尓は、二人の話に水を差すように横からパーテンに酒を註文した。
「今朝ぼくは、米国の観光客と話していて、自由と正義の為に死ぬ奴等のことを、腹の中で嘲笑していた。そのことだけど、最前話していた赤ん坊が、もし仮りに期待通り、いや真相が分る迄は誰も期待していた訳じゃないけど——、君の言う通り死んで居てそのことによって周囲が凡て旨く行っていたとしたら、その子は、何の為に死なねばならなかったのかと思ってね。これもやはり親の自由と正義の為に死んだってことになるのかな、父や母の、そしてそれぞれの家族たちの自由と正義のために——、罪のない弱い立場にある者が死なねばならないってことなのか？」
「君は、悪酔いしたのかね。しっかりしろよ。酒は楽しくあるものだよ」友人はさも困ったと言わんばかりにパーテンと目を合せて笑っている。
　尓の内部で、何かが崩れ始めていた。それは波頭のようにあっけなく束の間に跡形もなく崩れてしまうもののような気がした。
「おい助教授、人を教えるのが仕事なら教えてみろ。自由って何か、正義って何なのか。今君はその子の死ぬのが最善の策とか言ったな、でもその子の側に立てば、何の正当な理由あって死なねばならんのだ。親の為か、親の自由が冒されないために、親の正義が保障されるためには、そんな子は死なねばならんのか」
「おい止せ、あんな話を引き出したのは君の方だぜ。私が何も好んで為た訳じゃなかろうが」
　友人は色を作した。

（つづく）